

葉っぱの力(3)

群馬 直美

闘う。

人生は闘いに満ちている。

闘いながら人は大きくなり、

夢を夢で終わらせない力を身につけてゆく。

試練や困難は、神さまからのプレゼント。

夢の扉を開ける鍵……。

オバケテレビ

実はここ十数年、ちょっと怖い生活をしている。

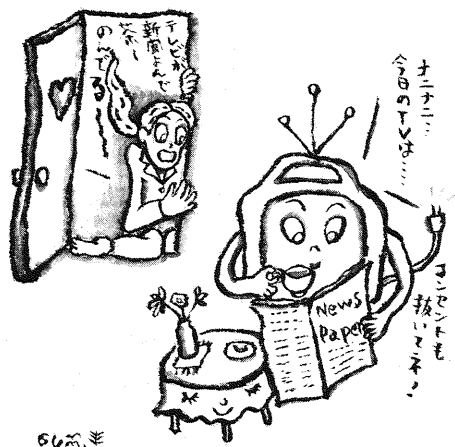
自宅のテレビが、ひとりでに点くのだ。

帰宅すると、誰もいない暗い部屋で、テレビが点いている。相当前から点いていたのか、部屋はほんのり

暖かい。誰かが、なごんでいたような暖かさ。

留守中何者かが入り込んで、わたしの帰宅を知り、逃げ出したのか。目に見えないものがまだ居座って、テレビを楽しんでいるような気がする。

朝消し忘れたのだ、と思いい受け流していたが、何度も続く。



テレビは人に見られてなんぼの代物。

そのテレビが点いている、イコール、誰かがいるという事。でも誰もいない……。

オバケがいるんだろうか、家には……。

オバケテレビはどんどん調子よくなり(？)、わたしがいるときでも平気で点くようになった。

寝ていると夜更け過ぎにいきなり点く。怖くて布団をかぶって寝た。主電源を切っても点く。コードを抜いたら、さすがに点かなくなった。

人と同じくモノもなにかを語りかけているのだから？ だとしたらオバケテレビは、なにを言っているのか？。

オバケアトリエ・コミュニケーション

家もその住人に向かって、なにかを言っているのだ

ろうか？ というのも、わたしのアトリエ……。

倉庫の二階に間借りしたアトリエとの付き合ひも、かれこれ二十年になる。

当初、このアトリエ、昼でも夜でも大きく軋んだ。

古い家屋がミシツという、あれ。訪れた友人たちも「いつたい、これはなにごと？」と青ざめてしまうくらい。

深夜、ひとりこつこつ制作していると突然ミシツ。

縦長三十坪のアトリエの遠くのほうが軋みだし、だんだん近づいて来る……怖くなって、すぐに自宅に逃げ帰った。

……ああ、今日もアトリエに負けた！

こんな格闘を繰り返しながら、日々制作に励んだ。

四六時中、アトリエはミシミシいっていた。そのうち度胸が据わり、そんな軋みも屁の河童になった。

ようやく創作の指針が、はつきりしてきたとき、本当に不思議なことだけど、アトリエの軋みは、びたり

と鎮まった。

あのとてつもない軋みは、なんだったのか？

家もまた、人が住んでなんぼの代物。

新しい家でも人が住んでいないと、年を取るのが早いのだそうだ。だから、例えば人が住んでいなくても、定期的に窓を開けて、外の風を入れてやる必要がある。



アトリエは、わたしが毎日通ったお陰で、若返り軌まなくなつた。そしてまた、アトリエは軋みながら、わたしを鍛えてくれていた。

「そんなにヨワツチカッタラ、世の中渡つていけないぞ！ ミシツ！ そんな絵を描いていいのかわ！ ミシツミシツ！」

持ちつ持たれつ、アトリエとわたしのコミュニティケーション。

浮浪葉

こんなアトリエだけど、いろんな人が訪ねて来た。一番記憶に残っているのは……やはり、あの人だ。嵐の晩にひよっこり来た人。



突如現れた大天使が、マリアさまに言った。

「怖がることはない」

有名な受胎告知は、この言葉から始まる。

わたしは、キリスト教関係の出版社からの依頼で、クリスマスカードの絵を描いていた。描きながら、大天使の姿を想像した。

背中に巨大な羽の生えた人間……。

アトリエの屋根の隙間から、よく小さな鳥が入り込んでは大騒動になっていた、羽ばたきの音の強烈さは、身をもつて知っていた。それが、天使の大きな羽ともなれば……！

外は暗く風が強まり、窓ガラスをガタガタ震わす。半分開いたシャッターから外に出ようとしたそのとき、か細い人影が階段を上がってきた。

ほさほさの髪を固まらせ、黒々と垢にまみれた、浮浪者のおばさん！

街角で奇声を発し爆発するのを、わたしは何度も目撃していた。その人が今、目の前にいる！

心臓がばくばくして口から飛び出そうだった。

ぶるぶる震えながらも仁王立ちするわたしに、意外にも小さな声でつぶやき始めた。

なにを言っているのか、全くわからない。

それでも、全身を耳にして聴き入っていると、状況がはつきり見えてきた。

通りで爆発していたのは、確かにこの人だったかもしれないが、今のこの人じゃない。

今、この人は震える魂で、わたしに一生懸命話している。なんとかわたしとコミュニケーションをとりたいたと、必死になっている……。

この人を理解したい！ 心底、思った。

なんとか、コミュニケーションしたい！

すると、垢まみれの浮浪者のおばさんが、とてもきれいな人に見えてきた。くつきりとした目鼻立ち。きちんとお風呂に入り、垢を落として身なりを整えれ

ば、かなりの美人だ。こんなにきれいな人が、どうしてここまで身を落とすことになったのか……。

心が痛くなった。抱きしめたい気持ちでいっぱいになった。

「おばさんは、女優さんだったの？」

思わず口をついて出た言葉に、自分でもびっくりした。おばさんは、つぶやくのをやめて、わたしを見つめた。

「だって、ブリジット・バルドーみたいにかいだ！」

「ああ……神さまあ……」

そして、おいおい泣き出した。

おばさんの口からこぼれ落ちた言葉に、今、ここに、わたしたちの頭上に、神さまがいる！ と思っ

た。おばさんの心の叫びを聴いた気がした。わたしも泣いた。

ふたり手を取り合って泣いた。

おばさんの手は、砂でじやりじやりしていた。

薄汚れた木綿の花柄ノースリーブ。赤茶のだらだらつと裾の長いスカート。腰に荒縄を巻いたおばさんは、ノースリーブの袖口に手を突っ込むと、二本の瓶ビールを取り出した。

服は、カバンにもなっていたのだ！

「これ、飲んで」

びっくりするわたしを尻目に、

「また来るから。今度は、友だち大勢、連れて来るから」

嵐の気配が強まる夜の中に、何度もお辞儀をしながら、消えていった。



その後、アトリエに友だち大勢連れて、おばさんは

来ることもなかった。それどころか、その日を境に、

この街でその人の姿を見かけることもなかった……

と、ある人に話すと、

「かわいそうに。アトリエに泊めてあげなかったから、おばさん死んじゃったんだね」

と言われた！

そうじゃない。おばさんは、今もどこかで生きてい



る。垢を落とすきれいになっちゃったから、気づかないだけなのだ。ひよっとしたら、女優業に戻り、テレビに出ているかもしれない。

夢を見た。きれいになったおばさんが、生き生きと暮らしている夢……。



オバケテレビのその後。

ビデオが壊れ修理屋さんに来てもらったとき、一緒に見てもらったら、部品がひとつ壊れていたせいだった。た。

オバケテレビは、「ボク、コワレテマッス」て、訴え続けていただけだったのか！

でも、修理したばかりだというのに、また自動的に点くようになった。

これはやっぱり、家にオバケがいるせいだ！

あのおばさんも、本当の本当は、大天使だったのか

もしれない……。



怖かったけど、心と心が通じ合った、あの一瞬。

ポロポロの魂の輝きが、今もわたしの心を暖め続けてくれている。

コワガルコトハナイ……

すべては、ここから始まるのかも。

余談だけど、その後訪れたルーマニアで、ジプシーの子どもたちがあのおばさんと同じように、「服カバン」方式を採用していた。

国境を越え、人の知恵も万国共通！

森羅万象、

生きとし生けるものうちに、

等しく宿る魂の輝き。

(葉画家)

☆本文中の絵は筆者による。